

論文審査の要旨
Summary of Dissertation Review

博士の専攻分野の名称 Degree	博 士 (学 術)	氏名 Author	SOULATHA SAYALATH
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 Title of Dissertation Perilous Steps towards US-Lao Rapprochement: The Case of Joint Accounting of POW/MIA, 1975-2016			
論文審査担当者 Dissertation Committee Member			
主 査 Committee Chair	広島大学大学院国際協力研究科	教授	片柳 真理 印 Seal
審査委員 Committee	広島大学大学院国際協力研究科	教授	川野 徳幸
審査委員 Committee	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	山根 達郎
審査委員 Committee	広島大学大学院国際協力研究科	教授	吉田 修
審査委員 Committee	武蔵野大学政治経済学研究科	教授	中園 和仁
〔論文審査の要旨〕 Summary of Dissertation Review			
<p>本論文は、米国とラオス人民民主共和国の外交関係について、戦争捕虜・作戦行動中行方不明者の共同探索事例に焦点を当てた研究である。第1章はベトナム戦争という歴史的背景を説明し、研究の目的、先行研究のレビューとそれに対する本論文の独自性、研究方法と資料の説明、論文の構成を示す。第2章は1975年から1983年にかけての米国の当該問題に関する方針を考察し、ラオスとの直接解決に舵を切ったことを明らかにする。第3章は1985年に協働探索という協力を開始するまでのラオス側の主権に関する懸念を論じる。ラオス側としては、米国が支援するタイを拠点とした襲撃をやめさせるために本件交渉を利用し、またベトナムからは独立した国家であることを米国に認めさせようとする意図があったことを示す。第4章は1985年から2016年にかけての共同探索の協力と、二国間関係の発展との関係を分析する。また、二国間協力の一つである人道的援助が、米国の攻撃に起因する不発弾の問題と密接に関連していることを論じる。第5章は30年間にわたる協力関係にもかかわらず、ラオスの政治エリートの間には反米意識が残存していることを考察し、第6章で以上の議論を総括している。</p> <p>質疑応答では、重要な一次資料が用いられていること、未だに機密扱いで使えない史料があり、それは将来の研究対象となることを確認した。また、米国の外交方針としてはなぜレーガン政権時代にラオスとの直接交渉が開始されたのか、冷戦との関係、キーワードの解釈などについて質問、指摘がなされた。これに対し、候補者からは概ね適切な回答がなされ、また今後の研究課題となる点を確認された。共同探索を中心とした米国とラオスの関係を、ラオス側から研究することは新たな試みであり、本論文の成果として評価できることが認められた。</p> <p>以上の審査により、審査委員は全員一致で、本論文が博士（学術）が授与されるに値するものと判定した。</p>			